

清沢満之語録 2001年 岩波書店

第一部 宗教哲学

宗教哲学骸骨 3

序論 宗教と科学 5

- 一 宗教的能力
- 二 宗教的能力の対象
- 三 信念と理性
- 四 理性と信念の関係

第一章 宗教 9

- 一 宗教とは何か
- 二 宗教の定義
- 三 有限と無限
- 四 統一

第二章 有限と無限 16

- 一 有限と無限
- 二 依存と独立
- 三 絶対と相対
- 四 一と多
- 五 全体と部分
- 六 完全と不完全
- 七 図式的表現
- 八 両項の同一性
- 九 有機的構成
- 十 君主(主人)と臣下(下僕)の相互性(主伴互具)
- 十一 自力修行と他力(または救済)

第三章 霊魂 25

- 一 霊魂
- 二 霊魂の諸理論
  - (1) 霊魂は物質的物体である
  - (2) 霊魂は非物質的である
  - (3) 霊魂は統覚する実体である

第四章 生成(Becoming) 31

- 一 生成
- 二 貫通する同一性
- 三 生成と遺伝
- 四 原因と条件
- 五 因果の法則
- 六 絶対と因果作用
- 七 霊魂の発展

## 今村仁司著作目次集

### 第五章 善と悪 47

- 一 善悪の基準
- 二 基準の理論
  - (1) 功利主義
  - (2) 直観主義
  - (3) 神意論
  - (4) 合理主義理論
- 三 基準の確定
- 四 善悪の量と質
- 五 意識と無意識
- 六 諸理論の調停

### 第六章 心の平安と徳の開発<sup>カルチャー</sup> 55

- 一 原因の段階と結果の段階
- 二 原因段階と二つの要素
- 三 心の平安(信念)
- 四 徳の開発(修行)
- 五 二つの要素の対比的説明
- 六 成就と往生
- 七 成就(成道)
- 八 無限の無限数
- 九 光明の可能性
- 十 宗教と道德

### 他力門哲学骸骨(試稿) 69

- 一 宗教
- 二 無限
- 三 有限無限
- 四 根本の撞着
- 五 有限の外に無限がある
- 六 自力と他力の二門
- 七 有限は無我である
- 八 因縁所生
- 九 自覚の一致
- 十 開発(活動)
- 十一 補訂
- 十二 心霊
- 十三 知情意
- 十四 三つの作用のクラス
- 十五 心霊開発
- 十六 万有心霊
- 十七 無限無数
- 十八 無神論有神論
- 十九 一神論多神論
- 二〇 汎神論 万有開展論
- 二一 自利利他(上)

## 今村仁司著作目次集

- 二二 自利利他(下)
- 二三 自利・利他・方便の必然
- 二四 救済の必要
- 二五 自力と他力
- 二六 方便
- 二七 無限の因果
- 二八 疑問と非難
- 二九 無限の因果(続)
- 三〇 願行成就(無限の因果)
- 三一 三種莊嚴
- 三二 浄土
- 三三 伴属莊嚴
- 三四 有限の信心(華開蓮現)
- 三五 有限
- 三六 造業の種別
- 三七 煩惱
- 三八 無明
- 三九 迷悟凡聖
- 四〇 転迷開悟
- 四一 他力信行
- 四二 獲信因果
- 四三 正定不退
- 四四 信後行業
- 四五 信後風光

縁起存在論 163

因果の必然と意志の自由 164

宗教と倫理の相関 179

破邪顕正談 197

## 第二部 精神主義

精神主義 223

精神主義(その一) 224

- 一 精神主義
- 二 万物一体
- 三 自由と服従の相関
- 四 科学と宗教
- 五 精神主義と物質文明
- 六 宗教は目前にあり
- 七 競争と精神主義

## 今村仁司著作目次集

- 八 まずすべからく内観すべし
- 九 精神主義と唯心論
- 一〇 精神主義と他力
- 一一 迷悶者の安らぎと慰め
- 一二 精神主義と三世
- 一三 精神主義と共同作用
- 一四 親鸞聖人の御誕生会に
- 一五 絶対他力の大道
- 一六 生活問題
- 一七 他力の救済

### 精神主義(その二) 286

- 第一回
- 第二回
- 第三回
- 第四回

### 精神主義(その三) 302

### 精神講話 313

因縁と諦めること 314

公德問題の基礎 316

一念 321

平等観 326

心機の発展 336

真正の独立 341

宗教的信念の必須条件 345

善悪の思念による修養 350

信仰問答 355

天職および聖職 361

倫理以上の安慰 364

自ら侮り重んじるということ 370

倫理以上の根拠 373

今村仁司著作目次集

- われ以外の物や事をあてにしないこと 377
- 真の朋友 383
- 咯血した肺病人に与える手紙 388
- 宗教的徳徳(俗諦)と普通徳徳との交渉 398
- 我が信念 413
- 修養語録 421
- ソクラテス 422
- 天命に安んじて人事を尽くす 426
- 如意なるものと不如意なるもの 427
- 自己とは何か 431
- 理論と実践 433
- 不動心 438
- われわれは他人によって苦しめられるのではない 440
- われわれは外物によって苦しめられるのではない 442
- われわれは欲望のために苦しめられるのではない 443

清沢満之の思想 2003年 人文書院

序章 清沢満之の現代性 7

はじめに 7

一 清沢満之の生涯と仕事 8

二 われわれにとっての清沢の意義 11  
近代の到来

三 清沢満之との出会い 16

四 学道と行道の統一 18

五 精神主義 21

第一章 清沢満之と宗教哲学への道 31

一 西洋哲学との出会い 31

二 明治期仏教の危機と清沢満之 36

三 宗教哲学への出発 43  
「緒論」の分析  
清沢的「純正哲学」の課題  
超越的目的(意匠)の排除  
学的組織の構想

四 有規聯絡の概念 62  
関係内存在  
生成と有規聯絡

第二章 清沢満之の学問 71

一 清沢の仕事の概観 71 [『語録』解題とほぼ同文。]  
二つの清沢像  
宗教哲学  
精神主義論  
修養語録群

二 思想の構築 77 [『語録』解説とほぼ同文。]  
清沢満之の書法  
仏教と西洋哲学の出会い

三 有機組織論 80 [『語録』解説とほぼ同文。]

## 今村仁司著作目次集

仏教的存在論の探求  
有規組織論としての縁起論  
結果から出発して世界を把握すること  
万物相関の真実  
具体的現実としての個物

### 四 目覚めの構造——パラドクスとアポリア 88 [『語録』解説とほぼ同文。]

有規組織論から倫理へ  
自己配慮としての死の憂慮  
死の倫理的な性格  
全責任主義  
還相論  
全責任と無責任

## 第三章 智慧と覚醒 105

### 一 根本の撞着 105

有限と無限  
対立物の一致

### 二 知識と智慧 108

内在主義  
学的組織  
意味への問い

### 三 智慧と学知 112

仏陀と菩薩  
第一の差異  
第二の差異  
第三の差異  
智慧の定義  
智慧の三つのアスペクトと論議

### 四 覚者の満足あるいは円満充足 124

有限性の自覚の徹底  
智慧と絶対知

## 第四章 覚醒者の作法 131 [『無限洞1号』初出]

### 一 目覚めの状態 131

### 二 アポリアと無限への通路 133

語りえないもの  
通過の不可能性  
存在の満足

### 三 縁起論と覚醒 139

縁起の二重性

## 今村仁司著作目次集

常と無常、または真理と非真理

### 四 あるがまま(自然法爾)と満足 145

完全満足

現世内欲望

苦と欲望

自我的欲望との対決

存在の満足と世俗的幸福との違い

### 五 自利と利他 156

道徳との違い

還相的相互行為

## 第五章 清沢満之における縁起の概念 163

### 一 縁起の理法 163

二重のAspect

### 二 特殊人間的なもの 164

### 三 主伴互具論 166

清沢的縁起論

世界内人間すなわち縁起的存在

人間であることの例外性

### 四 法則性と因果性の区別 172

相依関係

相待関係

法則、因果性、自由

近代科学における両概念の混同

カントの例

縁起論の学的組織

## 第六章 清沢満之の哲学構想 183

### 一 清沢満之と哲学 183

### 二 『宗教哲学骸骨』以前 189

論文「純正哲学」〔第一章の三の「学的組織の構想」とほぼ同じ。〕

論理学草稿

倫理学草稿

### 三 『宗教哲学骸骨』における概念的組織 199

宗教哲学初稿と講義録

## 第七章 自我の欲望と暴力と現代世界 203



今村仁司著作目次集

はじめに 203

一 人間の本質としての暴力 204

暴力のグローバルな偏在

近代帝国主義と植民地主義の暴力とその傷跡

二 人間に内在する暴力 211

三 暴力に対する仏教的倫理 212

社会に対する仏教の態度

四 近代世界の現実 215

近代以前

西欧近代の世界像

「汚濁の世」

概念の酷使

知的革新

社会科学的センス

縁起の概念

内観反省

他者との関わり

関係主義の見方

俗世間と凡夫

近代の世界像

法権利と倫理

清沢満之と哲学 2004年 岩波書店

序文

第一部 清沢満之の基本構想

序説 清沢満之研究の方向と目的 3

はじめに

一 仏教と哲学 6

仏陀の学(Boudho-logie)

コスモロジー(宇宙論または世界論)とブッドロジー(仏陀学)

二 清沢満之における前期と後期 12

清沢満之の前期

清沢満之の後期

三 宗教哲学のディレンマ 19

理性と沈黙

カントとヘーゲルの「調停」

理性と宗教

第一章 初期清沢満之の思想 27

はじめに 29

一 「緒論」の分析 30 [『清沢満之の思想』第一章「三 宗教哲学への出発」の加筆]

清沢的「純正哲学」の課題

超越的目的(意匠)の排除

学的組織の構想 [最後のカントの引用以降は、新たに加筆されている。]

二 有規聯絡の概念 45 [『清沢満之の思想』第一章「四 有規聯絡の概念」に同じ]

関係内存在

生成と有規聯絡

第二章 無限と倫理 51

一 無限との関係 53

無限の観念

世俗と悪

無限による摂取と贈与論理

二 顕在と潜在 62

信念の獲得

## 今村仁司著作目次集

呪術と仏教の違い  
因果論  
飛び越し不可能な深淵

### 二 アポリアと「無限」の経験 72

アポリア  
無限による満足と不可能性の解消  
自利と利他  
欲望する人間としての悪人  
目覚めと他力  
責任の問題  
自我と自己の峻別  
呼びかけと固有名

## 第三章 智慧の開示 95

### 一 無限と智慧 97

宗教の本質  
調和の感受  
数的無限(無一際限)と質的無限(絶対無限)  
完全／不完全の用語  
阿弥陀は「人格」なのか  
無限に向かう態度  
無限無数と無限自体  
阿弥陀とは何か  
力としての阿弥陀

### 二 西洋思想における無限と有限 115

キルケゴールにおける無限  
信仰の逆説  
キルケゴールにおける自力と他力  
パスカルにおける無限と有限  
信と知

## 第四章 目覚めの構造 127

### 一 万物一体と共同倫理 129 [『清沢満之の思想』第二章「四 目覚めの構造」への加筆]

存在の理法  
自己配慮としての「死の憂慮」  
死の倫理的性格  
全責任主義  
全責任／無責任

### 二 現世道德の不可能性と「信」の逆説的成立 142

苦痛と煩悶  
無限によって対他欲望を解消すること  
職業、義務、他力信仰  
念仏の構造——発一言と証一言

## 今村仁司著作目次集

ナームの逆説(無限に服することのパラドクス)  
三信帰一と念仏  
他者の受け入れ——他者を忍耐すること

### 三 覚醒の不可思議 157

精神の修養(アスケーシス)  
行から信へ  
有限と無限の関係に内在する「不可思議」(ミステリウム)  
世俗倫理と宗教との根本的違い

## 第五章 自己への配慮と他者への配慮 165

### はじめに 167

#### 一 自己配慮の思想史 170

自己配慮と他者配慮  
プラトン  
ヘレニズム  
近代  
現代  
浄土門の基本命題

### 補論と資料 清沢満之とエピクテトス 183

はじめに  
エピクテトスとの出会い  
1. . 46  
付録1  
付録2

## 第二部 基本構想の展開——他力門哲学素描

### 第一章 縁起の二重構造——法則性と因果性 215

〔『清沢満之の思想』第五章 清沢満之における縁起の概念〕に加筆〕

#### 一 有限であること 217

世界の内部にあること  
内部と外部

#### 二 世界内人間と唯一無比の個人 220

死とは何か  
「もうあい」  
世界内人間  
縁起の理法  
清沢的演義論——主伴互具論  
世界内人間としてのダールマ、すなわち縁起  
人間であることの例外性

## 今村仁司著作目次集

- 三 「我一人」または個人性 227
- 四 法則性と因果性の区別 229  
死せる宇宙と生ける宇宙  
カントの例
- 第二章 本願とは何か 239
- 一 沈黙 241  
沈黙と言説  
本来の沈黙
- 二 沈黙を破ること 243  
梵天勧請の意味について  
ディアレクティケー／ウパデーシャ(論議、討議的対話)
- 三 本願の概念 250  
法蔵の願文  
慈悲について  
自利と利他  
妄念からの解放
- 四 論議 257  
ウパデーシャ(優婆提舍)の意味  
行としての論議(優婆提舍)  
論議の円環性
- 五 言説 267  
言説の問題  
戯論と言説  
反省と戯論
- 第三章 有機組織の概念 279
- 一 縁起への問い 281
- 二 有機的存在 281  
万物相関  
仏智の再構成としての論議  
因縁果
- 三 無限と有限の相即 291
- 四 求道と智慧 293
- 五 智慧と覚者 298

## 今村仁司著作目次集

### 六 智慧または仏智 302

問いと答えのなかで  
求道者  
覚者  
智慧  
有限な人間と覚者

### 七 智慧への道 308

智慧の探究(愛)  
学道

### 八 存在の満足 314

覚者の満足  
何のために覚者は法を説くのか

### 九 正覚 323

正覚の内容  
相互依存関係の二つの相

## 第四章 有限と無限 239

### 一 清沢的有限無限論の骨格 331

清沢満之の学的課題  
正覚の論理としての有限無限論

### 二 仏教的存在論の探求 339

存在論としての縁起論  
有機組織論としての縁起論  
結果から出発して世界を把握すること  
万物相関の真実  
具体的現実としての個物  
ヘーゲルにおける有限と無限  
展現有限の概念  
アミダと無限  
万物相関論と「語る我」  
広義の縁起論の概略  
無我と *personne*

## 第五章 智慧の構造 375

### 一 語りえないものを語ること 377

パラドクス  
アポフォーシス形式とポジティブ形式  
積極形式または積極記述  
消極形式の記述

### 二 自由と必然 381

常と無常

## 今村仁司著作目次集

自由と必然  
自由と前決定

### 三 歴史 390

歴史的自覚  
翻訳としての論議過程  
智慧への導入としての論議的解釈史  
清沢満之における仏教への導入  
受肉と展現

### 四 真理への目覚め 402

仏教的覚醒  
如来と不在的現前

## 第六章 語りえざるものを語ること 409

### 一 消極的言説 411

清沢満之と消極的言説  
Apophysis の言説

### 二 目覚めの論理学 421

消極弁証法と目覚め  
人間、この無なるもの  
言語行為(言説)  
戯論の論駁としての目覚め

### 三 論議による教化 431

教化的導入  
Enteignis  
覆蔵と非覆蔵  
二諦

## 第七章 超越の問題——有神論と無神論 439

### 一 清沢満之における超越問題 441

超越に対する仏教の立場(概観)  
仏教と無神論

### 二 無神論と有神論 447

終りと死  
無神論と出世間的人間  
空=涅槃への道  
無神論的「宗教」

### 三 歓喜の倫理 459

歓喜か幸福か

### 四 根源分割と空 464

## 今村仁司著作目次集

語りえないものとしての空  
無世界論と無神論  
贈与としての慈悲行  
現世内への回帰

### 五 無化 472 無化する無

## 第八章 無限他力の特質 477

### 一 無限の変容 479 展現無限 学知の構成 絶対無限と相対無限

### 二 他力の概念 489 他力の「他性」 いかにして他性を「知る」ことができるか 語りえないものを語ることの逆説

### 三 論証と指指し 495 demonstration / monstration 比喩と論証 「かのように」

### 四 妄念論 500 妄念(イデオロギー) 四角い円

### 五 妄念から正念へ 504 妄念からの離脱 無限は論理的に証明できるのだろうか 独自類の知見 互具と互融



社会性の哲学 2007年 岩波書店

第一部 社会性の原理

第一篇 存在の贈与論的構造

第一章 与えられて一ある

はじめに 5

課題

交通の原理的不可能性

探求の方針

一 原初の存在構造 8

存在感情

よびかけ

二 根源分割 16

線を引くこと [筑摩書房『暴力と人間存在』pp.70「2 線を引くこと(根源分割)」に引用]

三 分割の瞬間と出来事 21

分割の逆説 [筑摩書房『暴力と人間存在』pp.76「3 分割の瞬間と出来事」に引用]

tracer(線引き)とtrace(痕跡)

[筑摩書房『暴力と人間存在』pp.80「4 tracer(線引き)とtrace(痕跡)」に引用]

痕跡の二重性

痕跡と時間

人間的労働と根源分割

[筑摩書房『暴力と人間存在』pp.80「4 tracer(線引き)とtrace(痕跡)」後半部分に引用]

近さとしての自己現前

現前と制作

制作主義的存在理解の難点

根源分割の倫理的含蓄

分かち持つ

第二章 共同存在と贈与 39

一 共にあること 39

存在の感じ

応答

非主題化と主題化

二 与える働き 44

純粹贈与の変質

自己贈与

自己充足

所与性と有限性

## 今村仁司著作目次集

無限に包まれる

### 第三章 無限の概念 57

#### 一 語りえないもの 57

無限  
無限内包摂  
贈与する力  
相互包摂  
応答責任

#### 二 ネガティブな語り 65

非存在を媒介にした所与存在  
幸福の約束  
存在感情と言説の間のずれ  
神秘主義  
比喩と概念  
崇高

### 第四章 負い目 77

#### 一 負い目として—ある 77

所与—存在と負い目  
負い目をもって生まれる

#### 二 受ける恩と返す恩 83

自死と負い目  
殉死(公的な死)  
戦士のエートス  
恩と義理  
義理の相互性  
代理の自死

#### 三 存在の背反的構成 94

思想史的回顧  
過剰と過小  
正義の自己破壊  
負い目の合図  
疾しさ  
憂慮  
他人の死と葬儀

### 第五章 犠牲 111

#### 一 保存と破壊 111

負い目を感じる  
代理死の制度化(供犠)

## 今村仁司著作目次集

犠牲の身体  
禁止(タブー)

### 二 他者の死 120

自分の死と他人の死の「対立」問題  
疑似無限または代理無限

### 三 聖なるもの 128

殺害からサクリファイスへ  
秘密と神秘  
死の制御と内面化  
「原父殺し」  
仮説について  
サクリファイスと共食儀礼

### 四 歴史の可能性 144

自由と死  
エコノミーの供犠と供犠のエコノミー

## 第二篇 歴史的世界 153

### 第一章 社会をつくる欲望 155

#### 一 人間存在に特有のもの 155

人間と動物の差異  
自然のなかの病気としての人間  
空虚な無としての人間

#### 二 他者の視線 162

虚栄心と見せかけ  
承認欲望の二つの現れ  
虚しい欲望  
パスカルの欲望論  
スピノザの欲望論  
虚栄心の物化

#### 三 欲望充足の挫折 173

幸福と満足の違い  
承認欲望の奥にあるもの  
「古いもの」または伝統への欲望

### 第二章 歴史的時間 183

#### 一 歴史と時間 183

時間と行為  
時間から歴史へ  
歴史的時間

## 今村仁司著作目次集

テンポ化と時間化  
落下(Fallen)と頹落(Verfallen)

### 二 人間の歴史 191

現世と来世  
記憶  
行為と想起

### 三 歴史的時間の基本性格 197

歴史的時間の特異性  
経験の想起と意味付与

## 第三章 始まりと終わり 205

### 一 努力と否定性 205

自由な行為  
否定する行為と時間

### 二 死と時間性 209

人間と死  
死の仮象  
自然を前提しながら否定する  
歴史の始まりと終わり  
定常状態

### 三 歴史的世界の終局

「時の停止」  
特殊人間的なるものの絶対限界

## 第二部政治、経済、法

### 第一篇 政治 229

#### 第一章 政治的なもの 231

##### 一 国家 231

政治の本質  
外部征服と内部征服  
第三項の排除

##### 二 政治の領分 238

経済に対する政治の先行性  
闘争圧力  
政治領域の優先  
共同体と戦争

##### 三 権力の形成 246

## 今村仁司著作目次集

政治権力の普遍性  
第三者問題  
絶対的開始(commencement absolu)  
群衆

### 四 共同のもの(res publica) 260

国家創設の謎  
RES PUBLICA  
政体(government)の類型  
主権論

## 第二章 権力と権威 271

### 一 主権＝国家の形成 271

国家と国家装置の区別  
国家の本質  
民衆政体のなかの君主形式  
君主形式の形成  
君主一般の制作  
聖なるものと穢れ  
君主(主人)と下僕(奴隷)  
君主の位置  
君主形式の類型  
権威の形成

### 二 国家の内容 282

実力、権力、権威  
暴力と権力の差異  
国家と外部  
権威と権力

### 三 「政治以前の」ヒエラルヒー形成 293

原始的階層性  
ヒエラルヒーの遍在  
人と人を繋ぐもの(sociabilite)  
社交性  
篡奪としての権力  
「外来王」について  
ホモ・ネカンス(狩りをする人間)

## 第三章 支配の様式 305

### 一 政治的原初分割

政治的決断  
ノモス  
例外状況/政治における暴力的死  
ヴァルター・ベンヤミンの王権論

二 空無から権力へ 313

真空からの出発  
主権者のモラル

三 国家と道徳 318

国家の道徳性  
契約論と反契約論

四 国家存続の最小条件 325

国家の存続条件  
正統化機能としての「政治的」神話  
法による統治

第四章 普遍的共同体 335

一 人類共同体の理念 335

国家史としての人類史  
近代の理想  
絶対主義の終焉とブルジョワ時代の登場  
コスモポリス  
国家内個人と世界公民の分裂  
世界公民の実現に向けて

二 政治の絶対体系 348

社会と国家  
統治形態(政体)  
理念的統合原理の歴史的趨勢  
絶対体系

第二篇 経済 359

第一章 経済の概念 361

一 経済的事実とその意味 361

人間の経済  
身体と経済  
努力と労働/生きることの意味  
交易の重層性  
事実と観念の二重性  
意味の充填

二 社会的存在の構成要素 370

人間存在の基本構成  
社会生活を貫く欲望  
自己確信の主観性から客観性への転換  
承認のなかの贈与論理  
供犠

労働と交換

第二章 贈与の経済 385

一 与える—与えられるの存在 385

贈与と負い目の円環

与えられて—あるの情調(トーンズ、トナリテート)

現前存在と所与存在

二 贈与と放棄 395

「ソレ」の超越化の虚構

負い目

abandon(放棄)

自然と人間との切れ目としての負い目

自死と他人の殺害

三 贈与の経済または互酬性 404

贈与体制

挑戦から友好へ

道徳の登場

歴史のなかの現実の贈与社会

互酬体制の最終段階(絶対王権の時代)

蕩尽する王

第三章 贈与の社会的論理 417

一 社会理論における贈与論理 417

社会思想と贈与論理

贈与の社会関係

二 契約に内在する贈与論理 420

ルソーのケース

ルソーのパラドクス

フィヒテのケース

ヘーゲルのケース

マルクスのケース

バタイユのケース

第四章 交換 439

一 贈与体制の歴史的諸類型 439

贈与と交換の内的関連

贈与体制の歴史的展開

第一類型

第二類型

第三類型

贈与と交換の体制的差異

贈与体制解体の意味

二 交換の可能性 450

交換現象の出現  
他者の存在と交換要求  
交換体制と資本体制

三 経済上の正義 461

等価の正義と不平等  
経済における公正(衡平)の理念

第三篇 法 469

第一章 自由、欲望、法 471

一 法的第三者 471

法理念の由来  
社会のスタビリティ

二 自然と人間の差異 475

自然のなかの非自然  
意志  
欲望の展開  
活動としての自由  
自己意識

三 驚きと異和感 484

驚きと知  
距離の問題  
ノーマルからアブノーマルへ  
異郷化

四 異郷化の種々相 487

空間尺度の変貌  
時間尺度の異郷化  
アノマリー  
批判的自己反省

五 他者による承認と法の定礎 492

対他欲望から法の理念へ  
法理念の萌芽  
占有と所有の峻別

第二章 法的第三者と公正の理念 499

一 第三者の介入 499

法的第三者の存在条件  
理念の客観性



二 法と道德の差異 503

人倫と法

私的二者関係と公的三者関係

道德と自己関係

公平性(公的)と自己犠牲(私的)

三 政治的第三者と法的第三者の違い 506

政治的状态と法的状态

正義と世界の存続

四 第三者と正義の理念 510

第三者の法的性格

正義の歴史的な性格

正義の内容

同等性の概念

第三章 法の原初場面 515

一 法的正義の由来 515

正義と法の出現

原初場面の設定

二 威信の競争 520

挑戦の応酬体制

三 互酬 523

互酬の原理

挑戦の相互性

四 互酬と正義 527

互酬体制における正義

原初場面における二つの正義

第三の理念

第四章 法の絶対体制 535

一 同等であること 535

統治の原理

二 平等の原理 538

公的メンバー資格の平等

「貴族法」の法的含蓄

類型

三 等価の原理 543

交換の類型

## 今村仁司著作目次集

### 四 公正の原理 546

二つの原理の共存  
対立する原理の統合  
平等と等価の調停  
極限における公正の支配

### 五 結論と展望 551

親鸞と学的精神 2009年 岩波書店

第一部 親鸞研究序説

序 3

第一章 清沢満之から親鸞へ 7

一 清沢満之との出会い 7

二 清沢満之の問い 9

三 清沢満之が辿った道 14

四 満之から親鸞へ 16

五 親鸞をどう読むべきか 19

六 親鸞の学的組織 21

まとめ 23

第二章 親鸞と方法の問題 25

一 『教行信証』の学的性格 27

学的言説と論証

著者と著作

二 『教行信証』の二部門編制 35

外面的形式から見た編制

著作の内容から見た編制法

論証から見た部門構成

三 部門編制の問題点 43

文類編制の哲学的解釈

四 第一の学的部門—有限者から無限内存在に至る自覚過程 44

世俗内存在からの開始と覚醒過程

五 第二の学的部門 47

絶対知からの演繹的叙述

六 第一部門から第二部門への移行 48

第一部門と往相

無分別智(絶対知)の成就

真仏土

## 今村仁司著作目次集

第二部門への移行＝還相

### 第三章 親鸞における信の位置 55

- 一 信の存在は自明ではないこと 55
- 二 信とパラドクス 57
- 三 有限な世俗人間における信の不可能性 59
- 四 容易と困難(易行と難行) 65
- 五 アボリアの自覚と腑に落ちる知 70  
アボリア  
道理による知と腑に落ちる知
- 六 親鸞の著作の意味 73  
悪循環のパラドクスを生き抜くこと

### 第四章 親鸞と悪人の概念 77

- 一 悪の概念 77  
世俗内存在と悪の発生  
根源の欲望  
親鸞の考え方
- 二 自力と他力の弁証法 81  
他力の必然と哲学的理解  
通俗的善悪の反転
- 三 親鸞と哲学 86  
戒・定・慧は不要か
- 四 絶対悪からの解放の道 95

### 第五章 親鸞における覚醒の問題 105

- 一 四十八本願の縮減 105  
経典の構成の特質
- 二 本願の類別 107
- 三 自利利他構造の観点 112
- 四 横超と自利利他 117  
横超  
親鸞の横超論  
願作仏心＝度衆生心についての親鸞の理解

## 今村仁司著作目次集

五 実践の形式的構造 124

六 伝統的菩薩像の凡夫への還元 127

第六章 悪の概念と学の理念 131

一 親鸞の人間学 131

二 悪人一存在(悪人であること) 135

三 目覚めの過程 141

四 法哲学(政治哲学)の萌芽 148

第七章 浄土門仏教の人間観 161

一 原始仏教における悪の観念 161

二 浄土門仏教における悪の観念 164

三 現代における悪の観念 170

第二部 エッセー 179

一 本願とは何か—親鸞思想の鍵概念(1) 181 [『無限洞4号』初出]

経典の語りの作法

説得について

説得法の類型

行為の人間学的基礎

願と行と果報の人間学的統一

方便願と成就願

まとめ

二 凡夫とは何か—親鸞思想の鍵概念(2) 193 [『無限洞3号』初出]

伝統的な凡夫論

凡夫の概念

凡夫性と煩惱

凡夫と悪の内面的関係(不可分の関係)

三 現代における悪の本質 207

現代の悪とは何か

ヒューマニズムの類型

イデオロギー的ヒューマニズムの危険

危機の乗り越えの方向

近代システムと自然破壊

有機的自然の「権利」とモラル

## 今村仁司著作目次集

- 四 漱石と親鷲 221
  - 青年時代の漱石
  - 晩年の漱石
  - 則天去私と仏教
  - 夏目漱石と清沢満之
  - 死と死後をめぐる問題